続・家族理解入門

家族の構造理解・応用編

第４回

団士郎

　退職してから、コンサートツアーのように全国でワークショップを繰り返している。先日は東京（両国）、群馬(渋川)、富山(高岡)と三日間連続だった。そこでは「家族理解」という言葉で表していることを、参加者に繰り返し話し、実習して貰う。

　支援、援助には様々な要素がある。だがその根底にあるのは、対象者理解である。逆に考えれば明白だと思うが、誰にも理解されていないと思って沈んでいる人の沼が一番深い。

　この世界で、誰かは自分のことを分ってくれている！そう思えたら、一息つけたり、もうひとがんばり出来たりする。

　基本的なところで、人は皆、自分のことは自分で引き受けて生きてゆく。だからその時、周りの誰かの理解が届いているのは有り難い。

　家族理解ＷＳでは、基本的にこの一点の実現のための考え方とスキルを実習している。たいそうなことではないから、繰り返していると上手になるし、現場で役立っている実感も持てる。それが専門職援助者としての自分の安定感にも繋がる。

四　同胞サブシステム

家族の構造について考えるとき、サブシステムの話になると、関心のおおかたは「夫婦・両親」に向く。家族にとって、中核となるサブシステムがカップルであることは異論のないところだ。

一方で近年、ある種の家族の切なさを秘めたテーマとして、同胞サブシステムのことが浮上の気配を見せている。確かなデータを持っているわけでも、そう大きな時代のトピックスになっているわけでもないが、日常の臨床場面で私はなんとなくそう感じる。

背景として予想しやすいものの一つが高齢化社会だ。子どもの数は少なく、両親の寿命は延びた。年金問題のずさんさに代表されるように、社会の様々な前提のあっけない崩れは、個々人の老後に少なからぬ不安を抱かせている。振り込め詐欺被害の底流にも、これがあると思う。

こんな時、人が自分の未来を思って、なにがしかの防衛的行動に出るのを止めることはできない。その影響が兄弟姉妹のある家族関係に反映してきているのではないだろうか。

かつて多人数の同胞関係には蓄積されたパターンがあった。そんな中で育った人にも同胞イメージの共有があった。そこでは共存や分担は自明の理屈だった。

一方、この三、四十年、社会の表向き主張は個の確立、自立だった。家制度の名残のある大家族には否定的気分が主流となり、核家族が囃された。共同から個へ、共用から個人用へ、大家族から核家族化へ、この価値観が戦後社会の消費拡大を促し、経済復興のベースになってきた。しかし現在、それがまた方向を変え始めている。

いうまでもないことだが、私達の社会はいつも変化し続けてきた。それが結論に到達することはない。いつも揺れ動き、加えて右肩上がりの経済成長も誤解である事を実感させられた。変化することは止められないし、良くなるばかりの変化ではないことも認めざるを得ない。

家族という枠を放棄するなら、今とは違った現実も登場するだろう。しかし人は「家族」という括りを止めようとはしなかった。

個別にはそれを訴えた人も、実行した人もいた。少子化も非婚化も家族の継続を拒否しているかのように映るし、社会は家族の解体を推し進めたがったようにも見えた。しかし私は、この考え方の根底は、とても「家族」欲望的だなと思う。

自分の家族や親子関係に苦言を並べたベストセラーを書いた女性の中に見える家族観は、見事に古典的家族への欲望に思える。家族は古くて新しいテーマである。誰が家族論を語りたがっているのかに関心を向けておくのも大切だ。

家族解体論は新しそうで古くさい。深まらなかった繰り返しの問題意識だ。

実家との距離

家族に関する、今日的戦略志向として、実家との距離の話題が登場したのを興味深くみた。ここには当然、心理的、物理的両面の距離が含まれる。

私が指導に関わっていた修士論文の中に、「女子学生の就職希望条件」を調査したものがあった。

今日の社会は、男女雇用機会均等法や男女共同参画社会などの言葉に表わされる方向で進められてきた。そして女性にも総合職の機会をと求める時代がしばらく続いた。

ところが最近の女子学生の就職希望条件を調査してみると、男子学生との間に、大きな違いが見られる項目があるという。

それは就業地に関する地理的希望である。多くの女子学生ができれば自宅から通える、あるいは

いざという時に、数時間で実家に帰宅できる場所を望んでいるという。

これを親離れの出来なさなどと短絡するのは一面的でしかなさそうである。彼女たちの多くは、大学進学については実家を離れて下宿している。ではなぜかと言うことになるが、それは後述する。とにかく、この点だけは男子学生の就職希望と大きく異なっている。

これは実際、私の世代の共働き主婦であった知人の口からも、こんな風に聞かされた。

「娘が東京の大学に行きたいと言った時、周囲は反対したんだけど私は賛成したの。都会に出て、いろんなものを見聞きして、可能性にチャレンジしてくれたらと思ったの。私の時代も、ずいぶん自由にはなっていたんだけど、やっぱりなかなか実行できないことはあったでしょ。だから娘の人生のじゃまはしたくないと思った。

ところがね、いよいよ卒業という時になったら、家に戻って地元で就職しようと思うって言ってきたのよ。なんなのそれって思った・・・。でもそうか、最近の女の子って、そんな考え方の人も多いんだ・・・」

他にも、離婚後に実家に戻った三十代の姉親子と未婚の妹との間で、年老いた両親の取り合いのような意味不明の心の傷合戦をしているケースにも会った。

私が気になっているだけかもしれないが、近年、同胞サブシステムに関わる葛藤がいろんなケースの背景に見えているように思う。そしてそこには、親世代との世代間境界ラインの設定失敗が漂っている。

子どもが離れられないのか、親が離したくないのか。子どもは離して欲しいのか、つかまえていて欲しいのか。気持ちから言えばまさにアンビバレント、両方に決まっているのだが、親の行動としてどれが適切かの答はずっと昔に出ているはずだ。

人は基本的に自分のことを自分で面倒見られる自立を目標に、育てられてきたものだ。そしてそれが確保されたところで大人になった同胞の付き合いが成立するのだろう。

＊

女子学生だけに見られた就業地希望は、女性の生き方に関する優れた総合的判断の一面だとも言える。

彼女たちは就職時に、いずれは実現したい結婚も、出産も、子育ても、そして当たり前のように増えた離婚の可能性も含めた人生をイメージしているらしい。

その場合、暮らしのベースを馴染みのある地域社会、そして子育て支援の人的資源（実家の親）の得やすい所にと考えるのは、かなり戦略的だと言えるだろう。

二世代をまたぐ兄弟葛藤

親世代と

友人は兄弟二人の核家族で育った。兄が大学進学で家を出て、三年後に彼も大学進学で家を出た。そして先ず兄が卒業を迎えた。卒業の時期、どこで就職し、どこで暮らすかは様々な要因で決定される。

詳しいいきさつは知らないが、結果的に兄は地元には戻らず関東で就職した。

一方、二年後、友人は地元に戻り、自宅から通勤するようになった。その後、一家に何があったのかは知らない。細々した家の中の事情をいちいち聞かされる程の行き来もなかった。

彼の母が入院中だと聞かされたのは、「実はもうそれほど時間がないのだ・・・」と知らされた時だった。そしてあっと言う間に亡くなった。女性の平均寿命を考えると、ずいぶん早死にだった。

ここに初老の父親が一人残された。兄はそのまま関東で結婚しており、友人も結婚をして家を出て、子どももあった。

単身になった父の今後について、兄弟を含めたどんな話し合いがなされたのかは知らない。ただ、

亡くなる直前、友人は母から、「残るお父さんのこと、よろしくね・・・」と託されていたようだ。

ちょうどその頃、兄も転勤で関西勤務になり、大阪近郊の賃貸マンションに親子で暮らしていた。両親の住んでいた一軒家を一部増築し、友人（弟）一家がそこに入る話は、兄との相談抜きに進められたらしい。

こういう話を想像も含めて考えてみると、実際悩ましいことが多い。というのも、それぞれに配偶者がいて、そこには意見が存在する。父親は彼ら兄弟の肉親だが、今後の日常生活を考えると、兄弟よりもそれぞれの妻の意見が重要になるのは当然だ。ところがこんな話をフランクに腹蔵なく話し合える義理の姉妹などなかなかない。

そして彼ら家族の間にも、そういう難問が立ちはだかったのだろう。これが兄弟の意思疎通が決定的に困難になる始まりだった。兄弟家族間の行き来は全くなくなった。

祖父はずいぶん長い間、兄の子ども達に入学祝いや、卒業祝いなど送っていたそうだが、そのことに一切反応はなかった。

そしてやがて父も他界。この段階で兄が、法定相続分の確保にいきなり動いた。遺産といっても居住していた次男と共同名義の古家と土地以外、ほとんどなかった。不動産の父親名義分が相続対象になった。

とはいえ現に弟一家が住んでいる家である。評価額も実際は土地だけのものだった。このような場合の多くは、年寄りが世話になったという気持ちで、兄から相続放棄が申し出られて終わることも少なくない。

しかし彼らの場合、話し合う余地もなく兄は相続分を主張した。弟一家にすれば、土地・家屋を売却して兄の相続分を支払い、自分たちは転居するなど出来ない話だった。

兄弟で家庭裁判所の調停に出向くことになり、結果として友人は数百万円を兄に支払うことになった。

息子の進学でものいりな真っ最中に、兄への支払いのために新たなローンを組んで対応した。滅多にそんなことを話さない彼だったが、弱音を吐くようにこの話をした。

子世代に

そんな彼が今、自分の息子のことで、自分自身と全く同じ事態を抱えている。二人の息子の父親である彼は、長男との音信は希である。弟は自宅から大学に通い、結婚もした。その経過にいちいち両親は関わっていた。しかし兄のことはほとんど話題に上らない。まるで彼自身の兄と親との関わりの再現のように、親として弟に偏って近くいる。

友人は二人の息子の親として生き始めたとき、将来自分がこんな風になるなど思ったことはなかったろう。おそらく日々の暮らしがそれほど顕著に兄弟で区別されていたわけではない。小さな違いの積み重ねと、時々生じる選択の指し示す方向に従っていたら、こんな所にたどり着いたということだ。

愛情と名付けられたパイの大きさには限りがある。我も我もと求める子どもたちに親は、おそらく平等配分しているつもりだったのだ。しかしもらう方はそう思えなかった。とくに与えられた分量が少ないと思ってしまった者の記憶にそれは焼き付く。

カップルにおける男女の愛情は何等分かするものではない。しかし同胞の受ける愛情は、頭数に等分される。そしてそこにあるわずかの多い少ないに、いつも同胞は反応するのだろう。

腹違いの姉弟

古い友人（女性）から聞かされた話だが、妻というものは配偶者が亡くなってからも、その不貞やそこで生じていた結果を、簡単には認めも忘れもしないという。

友人の父が亡くなる直前、病院に来た見舞客

が職場の部下などではなく、母に内緒でずっと関わりのあった女性との間の、腹違いの弟だったと伯父から聞かされた。その話を友人は、意外にあっさり現実として受け止めた。

親子関係が事実として証明される材料はたくさん残されていた。しかし腹違いの弟は、何かを要求して現れていたわけではなかった。むしろ何かを求めずとも、立派にやってゆけるように支えてもらった実父が、臨終の床にあると聞かされ、「ありがとうございました」と言っておきたかったと現れたのだった。

細心の注意を払い、病院で付き添う妻(本妻)に気づかれないようにと、苦労しての面会だった。亡くなった後の葬儀にも、会社関係者として出席していたらしい。

相続

初めて知った弟のことだったが、友人の弟妹も比較的スムーズに事実を受け入れた。そして遺産相続の話し合いの中で、姉弟はあの人にも相続権があるのではと考えた。そして、法的な結論はともかく、話し合いはしておく必要があるという認識に至った。三人は一致して、「もうお父さんはお墓に入ってるんだし・・・」と思っていた。

そこで友人(長女)の口から母に、事実が告げられることになった。しかし母の怒りは予想以上のものだった。絶対に許せないという夫への思いを、残された腹違いの息子とその母親に向けた。

友人はしばらく母の側に立って、悔しさや無念さにつきあった。しかし母の話を聞きながら、そこまで厳しく拒否するものかと何度も思ったという。

なるほどと思ったのは、それが金銭問題ではないというのが、余計にこだわりとして爆発していたことだ。もし腹違いの弟が金銭的に困っていたのなら、母の気持ちはまだ納まったのかもしれないと友人は言った。

それなら、幸い自分たちは経済的に困っているわけではない。気の毒だからと少しくらいは考えても良いと、母はたぶん言ったと思う。

しかし事実はそうではなく、自分の知らないところで夫は、毎月きちんと生活費を送り、その息子を大学まで進学させ、節目には我が家でしたように、彼にも父親役割を果たしていた。だからきちんとした社会人に育っている。母はそれが許せなかった。

自分たち(姉妹弟)は突然現れた血の繋がった弟が、きちんと暮らしていて、わきまえを持って登場していることを良しと思っていたが、母にはそれが許し難かった。だから嘘をつかれたまま死なれて、まだこの上、私が何をしなければならないのだと怒ったのだった。

結局、事の決着はほぼすべて友人(長姉)が、動いて行った。しかし伏せておくわけにもいかないので、随時報告はしたのだそうだ。母親は経過を聞かされるたびに怒り、不安定になったそうだ。

血と契約

妻と夫は血縁のない赤の他人である。その上で、強く結ばれているはずの契約関係当事者なのだ。だからそこに知らされていなかった嘘があったことを母は認めることも、許すこともできなかった。

亡くなってしまった父のことを、今更責めても益のないこと・・・などと考えられるのは血縁者なのかもしれない。そういう意味では家族の中で配偶者は孤独なのかもしれない。

友人はそんな歳になって現れた弟に興味深く関心を向けていた。そして表には出さなかったが父親の行状も、それほど批判的には見ていなかった。むしろ言葉の端々に、彼ら母子にきちんとしてあげていた父を、男らしい人だと思っている節もあった。だからそれぞれが安定した暮らしの自分たち三姉弟に、新たに弟が加わったことを、意外な喜びと感じているところもあるように見えた。

これを一般的だとは思わないが、こんな話を聞くと同胞サブシステムと夫婦サブシステムは決定

的に異なるものだなぁと思う。そして改めて、家族の存在を左右するサブシステムは夫婦なのだと思う。

おわりに

少子化の流れの中、一人っ子も少なくないとなると、家族の議論に兄弟姉妹のことが当然のようにエントリーされているとはいえない時代になった。だから同胞サブシステムのことを深く考えたことがなかった。昔から言うように「兄弟は他人の始まり」だと認識していたら、そう困ることもないと思っていた。

中国は長らく一人っ子政策を採っていた。その国策が変更された今、一人っ子世代の問題を社会問題として抱えて今が動く。一方で、少子化対策に苦慮する先進各国がある。後者では先ず、兄弟姉妹の出生を推進する方向で一致をみている。

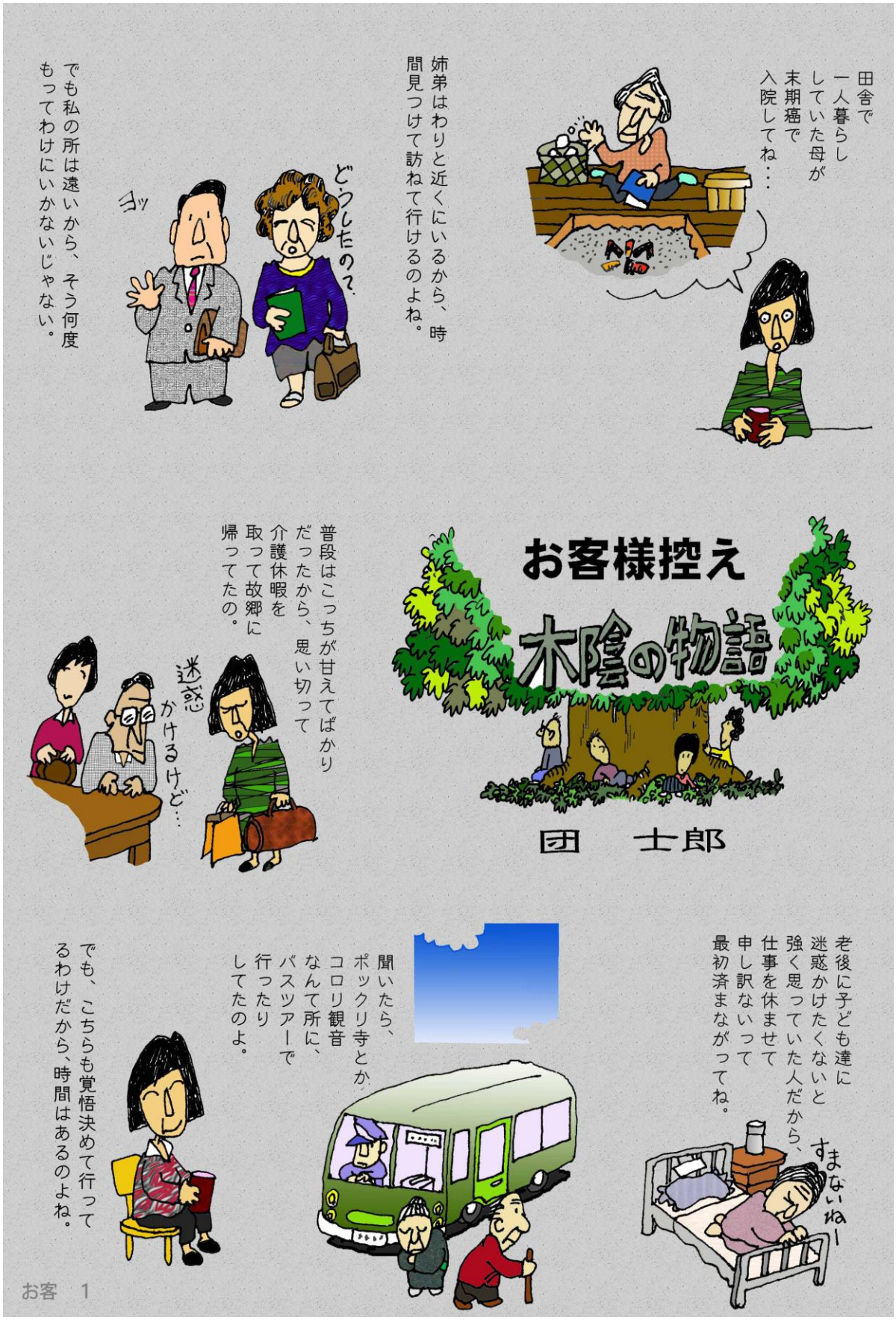
このどちらにおいても、同胞サブシステムの葛藤や課題は浮上しにくくなっている。しかしそこに問題がなくなったわけではない。

時代と共に家族観も変化し、かつて抑圧と忍従の象徴だった家父長制の「家」の記憶も多数派のものではなくなった。社会に共有された家族意識も変化し続けている。

いつの時代も、何事もなく平穏無事に暮らす自分たちを想像することなどできはしない。今を生きる家族には、今の苦しさや大変さが解決課題である。その解決指針にひょっとすると、昔多くの人々が毛嫌いして逃れたがった三世代家族が再登場してきているのかもしれない。

今日の子育て支援策が、現実吟味を経て到達する姿は、ひょっとすると昔ながらの大家族テイストになる気配すら見え始めている。

人は誰もそれほど賢くはないし、結論の出た世界に生きることもない。いつも途中経過の堂々巡りだ。はたして私たちは、いったいどんな家族を実現したときに、満たされるのだろう。


田舎で
一人暮らし
していた母が
末期癌で
入院してね…
姉弟はわりと近くにいるから、時
間見つけて訪ねて行けるのよね。
どうしたの？
ヨッ
でも私の所は遠いから、そう何度
もってわけにいかないじゃない。
お客様控え
木陰の物語
団　士郎
普段はこっちが甘えてばかり
だったから、思い切って
介護休暇を
取って故郷に
帰ってたの。
迷惑
かけるけど…
老後に子ども達に
迷惑かけたくないと
強く思っていた人だから、
仕事を休ませて
申し訳ないって
最初済まながってね。
すまないねー
聞いたら、
ポックリ寺とか、
コロリ観音
なんて所に、
バスツアーで
行ったり
してたのよ。
でも、こちらも覚悟決めて行って
るわけだから、時間はあるのよね。
お客　1

病室で一日一緒に
いるでしょう。
いろんな事が
話せてね。
初めてかもしれない、
あんなに長く
いろいろ話したの。

そしたら
こんな事を言うのよ。
ぽっくり逝きたいと
思っていたけど、
本当にそうなったら
最後に子ども達には
会えないで
死んでしまうことに
なるなぁと
思ったんだって。

それで一週間くらいは
寝込んでからにって、
お願いを修正に
行ったんだって。

二人で
大笑い
しちゃった。

入院することになって、
貴女とこんなに
ゆっくり過ごせて、
嬉しかったって言ったの。

でもそれは
私の方こそでね・・・。
最後に
あんな風に
過ごせて、
思い残すことは
ないって
お葬式で
思えたの。

でもね、
こんな事も
あったのよ。

姉とはちょっと
歳が離れていて、
弟はすぐ下
なんだけどね

ある日、母が、
「家のことは何もかも
放たらかしで出てきて、
恭子（姉）に任せたけど、
引き出しの中、
見るだろうなぁ・・・」
って言うの。

「気になるものなら、
取ってこようか？」
と言っても、あの子は
きっと気にするからねぇって。

お客　2

「何のこと？」
って聞くと、
宅配便の控えの
綴りだって言うの。
几帳面な母だから、
そういうモノも
きちんと管理
してるのね。

「恭子のところにも、
お前にも健太にも
収穫の時期や
旬の季節には、
みんなに
送ってたんだよ」

「でもね、何気なく見てたら、
あんたの所に送った伝票の
数が、恭子の
ところより
大分多かったの」

「お前の所は
子どもも
多いし、
食べ盛りは
大変だろうと
思った
だけなんだ
けどね・・・」

「恭子はそういうこと、
気にするからねぇ」
って本当に
心配そうに
言うの。

「そんなこと、お姉ちゃんは
思わないって」
私は本当にそう思っていたの。

ところがね、
介護が長引く
ことになって、
何度か行き来する内、
ちょっと無理言って
姉にお願いすることが
出来たとき、

母が亡くなりかけて初めて、
姉のことを自分は知らな
かったんだって気づかされた。

そして母は、
姉のことを
知っていたし、
私が姉のことを
理解していないって、
それも知って
たんだなぁと思う。

お客　3

家族って不思議ね。
弟のお嫁さんも、
「お義姉さんに
遠慮してる」って
彼に言うらしいのよ。
兄妹って難しいわね。

こんな兄弟姉妹間の話は、
これまでにいくつも
聞いた記憶がある。

そこにはいつも、
愛情の話が絡まっていた。

両親が姉妹を
公平に扱わなかったと
訴えていることが多い。

人は誰かに、
自分を一番
大切にして
もらわないと
気が済まない
もののようだ。

そして、
してもらった
ことは忘れても、
してもらえ
なかったことは
何時までも覚えている。

「上手に
死ぬのって
大変ね…」、
彼女がそう
つぶやくのを、
私は黙って
いろんな事に
ちょっと胸が
詰まりながら
聞いていた。

お客　4